

# 失恋 <うせこい>

作者：sinshiki

概要：テーマとして『花火』『失恋』『三角関係』を含み短めなショートストーリーです。終わり方が解らなく最後がいきまいち・・・・・・・・

俺には記憶がない。

ないと言っても数ヶ月程度だ。先月事故に巻き込まれたらしく、事故より前の数ヶ月分記憶がない。

医者は「思い出せないだけで記憶自体はある」と、言っていたが思い出せないのだから、『ない』のとそう違いはない。

皆が知っていることを俺だけが知らないというのは、まるで浦島太郎になったような気分だ。

勉強に関しても例外ではなく、抜けてしまっている。幼馴染の紗奈が、いろいろ助けてくれて居るので、わからなくてもどうにかなっている。

彼女は、甲斐甲斐しく俺の世話をしてくれる。そう、それはもう怖いぐらいに。

ありがたい限りだが、俺の知っている限りどうしてそこまでしてくれるのか、思い当たる節はない。

それでも、困った事もある。俺は、クラスメイトの長谷部さん、——いや、佑香と付き合っていたらしい。『らしい』と言うのは、俺には日記をつける趣味もなく、記憶も記録もないから、伝聞でそう聞いている。

自分の彼女の話をして他人に教えてもらうなんておかしな話だけだな。

それでも、俺の記憶はぎりぎり、去年一緒に花火に行った事は覚えている。その時はまだ友として幼馴染と三人で行った。

そんな訳で、俺にはその事実に実感がわからない。

学校に向かうための準備をして、着替えをしていると、トントンと、扉をノックする音が聞こえた。紗奈だろう。隣に住んでいる事もあり、事故以来迎えにきてくれている。

「なお君おはようー 下で待ってるね」

鞆を持ち、紗奈と一緒に学校に向かう。

二人、いつもの通学路を歩く。ほとんど毎日顔を合わせていることもあり、特に話題はない。

「佑香ちゃんとは、どう？」

何か話題を探していた紗奈が、彼女の事について聞いた。

「あぁ、『付き合ってる』って、言われても覚えていないから、いまいちなぁ」

「そうか……思い出せるといいね」

話が続き二人黙る。後ろから走ってくる足音が聞こえた。

「おはよ」

元気良く間に入ってくる。

「おはよう。いつも通り元気だな」

「紗奈ちゃんも、おはよ」

「おはよう。佑香ちゃん、今日の宿題やった？」

「あ～、やってない。うつさせて～。紗奈、おねがいっ」

なんだ、またやってないのか。

「自分でやれよ。紗奈に写させてもらってばかりで」

「ちゃんとやってた時もあるもん。って言っても、覚えてないもんね」

「別にいいよ。なお君だって教えてもらってばかりで」

まぁ、そういう言い方をすればそうだけど。

「そうだけどさ、俺は一応やろうとはしてるじゃないか」

「私だって、やろうとはしてるもん。ただ、やることを忘れちゃうだけなんだから」

それはやろうとしているのか？ なんて、思うが言っても仕方ないのでやめておこう。

佑香は腕を絡め、紗奈は俺を間に挟み佑香と話をしながら、俺たちは学校に向かった。

学校では、よくわからない授業が進む。『後で教えてもらえるから』と、俺は聞いていないことが多い。ノートだけは、取っていないと紗奈に怒られるから、ノートをとるだけの作業。

それが、俺の授業の風景だった。

一日分の授業が終わると、すぐに佑香がやってきた。

「直人、帰ろ〜」

と、現れる同時に叫ぶ。一瞬注目を集めるが、いつもの事かと皆それぞれの雑談に戻った。

俺も、帰り支度をして三人で帰る。

「今年も、花火行こうね。三人で」

俺たちが去年も行った花火大会。

「私は、いいよ。二人で行きなよ」

紗奈は俺たちの関係を気にして遠慮した。当然といえば当然か。

「いいの、私は三人で行きたいからっ。良いよね、直人」

「俺は良いけど」

特に迷う理由もない……ではいけないのだろうけど。俺の中では、三人で仲良く花火を見に行った記憶しかないから、仕方ないのだろうな。

「ね、いいって。明日予定がない事ぐらい知ってるんだから。決定ね」

強引に決定してしまった。佑香はいったい何を考えているのか。

それでも、彼女がそう望むならそれを拒む意味もないし。

「それじゃ、また明日ね」

佑香と別れ、俺たちもそれぞれの家に帰る。

晩御飯の後に、いつも紗奈が勉強をしに来る。勉強をすると言っても、実際にするのは俺で、紗奈は教えているだけだ。

この前「俺を教えていて、自分の勉強もあって大変じゃないか」と、聞いたことがあったが「人に教えているのは復習になっていいよ？」と、言われた。

教えてもらっている俺は、ありがたい限りだからいいけど、「本当に大丈夫なんだろうか？」と、不安になる。

「じゃあ明日、午後六時にね。遅れたら駄目だからね」

そう言われたら、早く来るしかないだろ。と、早く来たものの、俺は一人ぼっちで待ち惚けている。時計を見れば六時十五分を指していた。すでに三十分は待っていることになる。この暑くて仕方ない季節に一人で待つのは辛い。せめて紗奈と一緒にこようと思ったが、何故だか留守だった。

『ごめんね待たせて、もう行くから』

などとメールが来ていた。

それから、しばらく待つと佑香が紗奈を連れて、やって来た。文字どおり、佑香は紗奈の手を引いて。

どうやら紗奈が浴衣を着るのを嫌がったらしい。そういえば、去年もそうやって着たがらなかったな。

すでに、まっすぐ目的地につく事さえ困難なぐらい、人が溢れていた。出店には人が並び、『祭』と言う感じだ。

しばらく何も話さず歩き、休めるようなところを探し見つけるとすぐに、「私、ちょっと何か買って来るね」と言い、紗奈はどこかに行ってしまった。

「懐かしいわよね。覚えてるのかな？」

二人きりになり、突然そんな事を言った。

「あの頃はまだ、私は直人の彼女じゃなくて、私がお願いして三人でここに来たね。ねえ直人、紗奈のこと嫌い？」

話の流れが読めず、俺は戸惑う。

「嫌いな訳ないよね。ただ近すぎてわからないだけだもの」

俺の返事を待たずに佑香は続ける。

「私、もう辛いの」

「ごめん」

何を言われているのか、ようやくわかった。今日はそう言うことで無理矢理にでも来たかったのだと。そう思うと、急に気が重くなった。

「確かに、そのことも辛いけど、それよりも辛いことがあるの」

そこで区切り、佑香が俺の正面に来て、告白するかのように、覚悟を決め続きを言う。

「あのね、去年ここに来た時にはもう、紗奈が直人のことを好きなのを知ってて、花火に誘

って、それであの子から直人を奪ったの」

「でもそれは……」と俺が話すのを遮りさらに言う。

「その後、偶然の事故でこうなっちゃって、はじめはどうしようかと思ったの。この恋は無かったことにして、紗奈に譲ろうと考えたの。だけど紗奈は良い子だから、直人に私のことちゃんと言って、関係が続くようにって」

確かに、そうだ。記憶を無くして一番初めに言われたのは、長谷部 佑香は直人の彼女だからと。

「私だったらその隙に、直人を奪おうとしたと思うの。でもね、紗奈は記憶を無くした直人の世話をしながらも、自分の気持ちを押し殺して続けたの。そして、直人の為にいろいろ頑張ってる。だからわかったの、本当に直人のことが好きなのは紗奈なんだって。私は今だって、直人のこと好きだよ。でもそれは紗奈にはかなわないなって。だからさ、直人。もう良いよね？」

そう言い終わると、佑香は居住まいを正した。

「長谷部 佑香は伊井 直人をふりました。また、友達としてよろしくね。もちろん応援してるから」

言い終わると、「すぐに俺に背を向け歩き出す。

啞然としていて一步出遅れた俺が追いかけてようとした。

けども、

「駄目来ないで。いいの、これで……これで」

彼女は、走って行ってしまった。俺はただそのうしろ姿を見送ることしか出来なかった。

一人残された俺はただただ立ち尽くすだけ。

それから少しして紗奈が血相を変えて走って来る。

「どうしたの？なお君。佑香さんが突然『直人君をよろしくって』

「あぁ、ふられたよ」

「え、え？」

戸惑い驚く紗奈、解らなくて普通だろう俺ですら、状況を飲み込めてないのだから。

「どうして……」

二人立ちつくすそこでは去年と変わらず、花火の音が鳴り響く。